

2020 年 9 月 6 日（日）「祈りにおける畏れ・親しさ・確信 ～礼拝の心得〔その 2〕～」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 4:17-5:6

4:17 神殿に行くときには、足に気をつけなさい。聞き従おうと神殿に近づくほうが、愚かな者がいけにえを献げるよりもよい。彼らは知らずに悪事に染まるからだ。

5:1 神の前に言葉を注ぎ出そうと、焦って口を開いたり、心をせかしたりするな。神は天におられ、あなたは地上にいるからだ。言葉を控えよ。

2 仕事が増えれば夢を見、言葉が増せば愚かな者の声になる。

3 神に誓いを立てたら、果たすのを遅らせるな。愚かな者は喜ばれない。誓いを立てたことは果たせ。

4 誓いを立てて果たさないなら、誓いを立てないほうがよい。

5 口によって身に罪を負うことのないようにせよ。使いの者の前で「あれは過ちだった」と言ってはならない。神がその声に怒り、あなたの手の業を滅ぼして、なぜよいだろうか。

6 夢が多ければ、ますます空しくなり、言葉も多くなる。神を畏れよ。

《新改訳 2017》伝道者の書 5:1-7

1 神の宮へ行くときは、自分の足に気をつけよ。近くに行って聞くことは、愚かな者たちがいけにえを献げるのにまさる。彼らは自分たちが悪を行っていることを知らないからだ。

2 神の前では、軽々しく心焦ってことばを出すな。神は天におられ、あなたは地にいるからだ。だから、ことばを少なくせよ。

3 仕事が多ければ夢を見、ことばが多ければ愚かな者の声となる。

4 神に誓願を立てるときには、それを果たすのを遅らせてはならない。愚かな者は喜ばれない。誓ったことは果たせ。

5 誓って果たさないよりは、誓わないほうがよい。

6 あなたの口が、あなた自身を罪に陥らせないようにせよ。使者の前で「あれは過失だ」と言ってはならない。神が、あなたの言うことを聞いて怒り、あなたの手のわざを滅ぼしてもよいだろうか。

7 夢が多く、ことばの多いところには空しさがある。ただ、神を恐れよ。

【序論】

私たちの信仰生活において「祈り」ほど重要なものではありません。それと同時に、「真の祈り」をささげることほど難しいものはないと私は感じてきています。私は「真の祈り」というものを理解し、それを具現化するために、いくつかの取り組みをしてまいり

ました。第一に、聖書全体に出てくる祈りの箇所を^{しらみつぶ}虱潰しに書き出し、それを真似してみろという作業です。現在祈祷会では詩篇を学んでいます、その理由は、詩篇は1～150篇すべてが「祈り」の言葉と言えるからです。第二に、祈りに関する書物を読むことも大切であり、「主の祈り」の解説はもちろん、先人たちの優れた教えや祈りが聞かれた経験から多くを学ばされることもあります。第三に、人の祈りから学ぶことも重要であり、それによって自分の祈りが正されることもあります。真の祈りには老若男女の区別はありません。

祈りはその人の信仰そのものを表すと言ってもよいでしょう。その人の祈りには確信があるか、日頃聖書を読んでいるか、祈っているか、祈りの言葉の背後に神との交わりがあるか、いろいろなことが分かります。それだけに、人前での祈りは緊張するものです。難しいのは、人前で祈るとき、人を意識する自分が現れやすいということです。人に聞かせるための祈りとなつては、それはもはや祈りとは言えません。あくまでも、神と自分との一対一の関係を第三者が見て、そこにアーメンと唱和するのです。司会の祈りはその意味で神経を使うものであり、そこに「会衆を代表する」という要素が加わります。会衆の祈りを代弁するという責任が伴うのです。賛否両論あると思いますが、私は無駄な言葉を語ることがないように、一度祈りを文面に起こし、それを実際に言葉に出してみて、不適切な表現があったら修正し、何度も反復したうえで礼拝に臨むようにしています。理想を言うならば、そのような作業なしにまったく無駄なく洗練された祈りが自分の口からほとばしり出るようになることが目標ですが、その域に達するには一生かけての訓練が必要でしょう。このように、私自身が祈りに関して学徒であることを告白しつつ、未完成な者として今日の箇所から語らせていただきます。

【本論】

前回もお伝えしましたように、コヘレト 4:17-5:6 は本書の中でも珍しい「儀式律法」と関係する内容を扱っています。「礼拝における姿勢」が教えられており、その際に礼拝者がささげる三つ行為、①いけにえ ②祈り ③誓い の質が問われている。今日は第二の「祈り」を扱います。箇所としては 5:1 のみとなります。

本論 1. 祈りに関して陥りやすい過ち

神の前に言葉を注ぎ出そうと、焦って口を開いたり、心をせかしたりするな。(5:1a)
これは祈りに関する戒めと言ってもよいでしょう。直訳すると「急いで口に上げるな。

すぐに神の前に言葉を出すな」となります。この二つのフレーズは、慌てて無思慮に神に呼びかけるなと教えています。祈りを始めるときには、自分はこれから神様に何を語りかけるかを整理し、それが神の御心に適うものであるかどうかをよく吟味しなくてはならないということです。この戒めには、十戒の第三戒、「主の御名をみだりに唱えるな」が含まれているでしょう。

まずここで考えなくてはならないのは、私たちは神の子として神を「父」と呼ぶことが許されている存在であるということです。親子であるならば、親しく気兼ねなしに声をかけることができるのではないのでしょうか。息子、娘が、「ねえねえ、お父さん」と気を遣わずに話しかける感覚があってもよいのではないか。もちろんそういう一面もありながら、コヘレトは聖なる神への畏れを忘れてはならないと言っているのです。

祈りにおいて、人が陥りやすい過ちがあります。考えうる限りのことを挙げてみましょう。

①マンネリ化

祈りがほぼ定型句になり、早朝のディボーションも、食前の祈りも、就寝の祈りも、毎日ほとんど同じ言葉を繰り返すだけになっているかもしれない。よく考えなくても「祈れる」のですが、実はそれは神との対話なのではなく、自分の中での言葉の堂々巡りとなっている可能性があります。

②信じていない

元より、その祈りが神に聞かれているという実感がなく、祈りが叶えられるという確信がない。神の力を信じておらず、そのような経験をしたこともないということがあるかもしれません。

③暴言を吐く

人に対してさえ言わないような悪い言葉を神の御前で発してはいないか。神に対しては何を言っても受け入れられると思いをしており、相手が聖なる神であることを忘れてはいないか。

④支離滅裂

祈るべきことがまとまっていない。私たちは大事な電話をするときに、相手に対して用件をきちんと伝えられるように、書き出したり、言葉に出してみたりするでしょう。神に対してはそうにしないでよいのだろうか。本当に叶えられたい祈りであるなら、言葉を吟味すべきではないか。

⑤ひたすら夢を語る

これは次回扱う内容となりますが、延々と自分の願望を並べ続けているかもしれない。神が何を望んでおられるのかを悟ろうとするのではなく、神に自分の願いを聞かせるこ

とに終始してはいないか。

⑥安易で果たさぬ誓い

あまりにも気軽に「約束します」「誓います」ということを口にし、誓ったことを果たさずにいる場合がある。このことも次回の箇所ですら厳しく戒められます。

本論 2. 聖定と祈りの関係

祈りにおいて、私たちが知らずして神に対して行なっている非礼に気をつけなくてはなりません。祈るからには、それは「意味のある祈り」である必要があります。

神は天におられ、あなたは地上にいるからだ。(5:1b)

コヘレトは、祈りにおいて言葉数を少なくすべき根拠を「**神は天におられ、あなたは地上にいるからだ**」と説明します。これはどういうことなのか。「**天**」とは、天空というより、神が臨在される領域を指します。それに対し、「**地**」は神の支配下に置かれた場所というイメージがある。つまり、人間の地上の営みは神のコントロールの下にあるのであって、人間が神をコントロールできるようなものではないということが言われているのでしよう。これまでの本書のメッセージから、そのように読み取ることができます。

- ・ 私は、神が人の子らに苦勞させるよう与えた務めを見た。神はすべてを時に適って麗しく造り、永遠を人の心に与えた。だが、神の行った業を人は初めから終わりまで見極めることはできない。(3:10-11)
- ・ 私は知った。神が行うことはすべてとこしえに変わることがなく、加えることも除くこともできない。こうして、神は、人が神を畏れるようにされた。(3:14)

つまり、祈りにおいて神に言うことを聞かせようという思い上がりを捨てるよう、コヘレトは警告しているのです。

ここで難しい問題に直面します。すべてのことが定められているのであれば、祈る意味とは何なのか。一切が神の聖定の通りに成就していくのであれば、人が祈って何の意味があるのか。この問題には次のように答えることができるでしょう。神はご自身の御心を実現していくために、聖徒の祈りを必要としておられると。誰かの罪を神が赦したいと願っておられるとするならば、その罪人をとりなす聖徒の祈りが必要なのです。神の怒りがなだめられるための祈り、神の心が和らげられるための祈りが不可欠なのです。一例として、アブラハムの祈りを取り上げてみましょう（創世記 18:20-33）。

神がソドムの罪を見られ、その町を滅ぼそうとしておられたとき、アブラハムはその町に住む甥ロトの家族を案じてとりなしの祈りを始めました。このときアブラハムは、神への畏れをもって語りかけています。「塵や灰にすぎない私ですが、あえてわが主に申

上げます」(18:27)というへりくだりの言葉は、まさしく神の御心に適うものでした。しかし、それでいてアブラハムの祈りは消極的ではなく、何度も神ににじり寄り、その町に 50 人の正しい者がいれば、45 人いれば、40 人、30 人、20 人、10 人と数を減らしていきます。しかも、この祈りの初めには、「**あなたは本当に、正しい者を悪い者と共に滅ぼされるのですか**」と、神の義に訴えて、半ば脅しをかけるような語りかけ方さえしています。ここに、アブラハムの信仰の本質が現れていると言えるでしょう。聖なる神を畏れ、しかし子としての特権をもって遠慮なく近づき、自分のとりなしを聞いてくださるという確信をもって祈っています。私はこのアブラハムの祈りこそ、祈りの中の祈りだと考えています。

本論 3. 祈りにおける畏れと親しさ（天にまします我らの父よ）

言葉を控えよ。(5:1c)

原文には「それゆえ」(כֵּן) という語が入っています。「**神は天におられ、あなたは地上にいる**」それゆえ「言葉を控えよ」というつながりになっている。「控える」とは、直訳すると「少なくせよ」であり、無駄な言葉をできるだけ省くべきことが教えられているでしょう。

ここでもう一つの疑問が生じてきます。私たちは祈りにおいて、常に最小限の言葉でしか祈ることができないのかという問題です。詩篇全体を読んでもときに、詩人がいつでも熟慮をもって祈り始めていたとは思えない内容のものも出てきます。特に、切迫した状況下にあつて、まさに敵に命を奪われそうになっているときに、詩人が怒りと怖れに打ち震えながら言葉を発している姿を垣間見ることがよくあります。そのような祈りは御心に適わないのか。主イエスの祈りもそうでしょう。ゲッセマネにおいて、主は苦しみ悶えながら、祈り続けました。人間には、そのような、もう祈らずにはどうにも自分を保つことができない状況下に置かれることがあるのです。しかし、その必死な祈りは真実な心の現れなのであり、神は先にその思いを知ってくださっているのですから、神を信じて祈り始めることができると私は信じています。

ゲッセマネの祈りにおいて、主イエスがどん底においても「**わが父よ**」(マタイ 26:39,42) と呼びかけているのに注目したい。この短い呼びかけの言葉の中に、主イエスと父なる神様の関係のすべてが現れています。主イエスは真の親子という最も親しい関係においても、神への敬意を表しているのです。

主の祈りにおいて、私たちは「天にまします我らの父よ」と呼びかけるよう教えられています。「天」という言葉は、神を「畏れるべき存在」として呈示しています。それ

と同時に「父」という言葉は、神を「親しむべき存在」としても呈示しています。私たちは日頃から「天のお父様」と呼びかけていますが、実はこの「双子の真理」が同居した呼びかけであるということを意識したいのです。畏れと親しみと確信をもって神に近づくことが、祈りにおける重要な態度だと思います。

【結論】

祈りのスタイルは一つではありません。公の祈りのように、一つひとつの言葉を吟味することも必要であり、またどん底にあってほとぼしり出る祈りがあってもよいでしょう。しかし、如何なる祈りにおいても、私たちの神に対する基本姿勢を失ってははいけません。それを私は、「畏れ」と「親しみ」と「確信」と定義づけたいと思います。如何なる状況で祈るにしても、この態度を表していくためには、日頃から神に対してそのように近づいていることが大切なのです。祈るときだけそうするのではなく、私たちの生活全体がそのような態度であることが求められているのではないのでしょうか。

【祈り】

天の父なる神様。この呼びかけのうちに、あなたへの畏敬と親しみを込めさせていただきます。私たちの全てを知られるあなたに、尚も自分を知っていただく祈りをささげます。あなたがそのような私たちの接近を喜んでくださるということを信じ、偽りなき自分を御前に表します。私たちに生涯に亘って祈り方を教えてくださり、まず聞く姿勢を持ってあなたの御心を探る者とならせてください。また同時に、自分にとって本当に必要なものが何であるかをよく考え、それが福音に生きることと合致しているならば、大胆に求める者となることができるよう。教会の祈りを整え、香り良き煙となって、常にあなたに喜ばれるものとなるよう、導いてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
祈りにおいて、まず神を畏れることを、信仰者の基本姿勢とさせ給う、父なる神の愛、
罪赦されたものとして、親しく「わが父」と呼びかけることを教え給いし、主イエス・
キリストの恵み、
空を打つようなものではなく、常に信頼と確信に満ちた祈りをささげさせ給う、聖霊の

親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。